平成二十八年四月十七日（日）
毎日新聞日曜版

新・心のサプリ

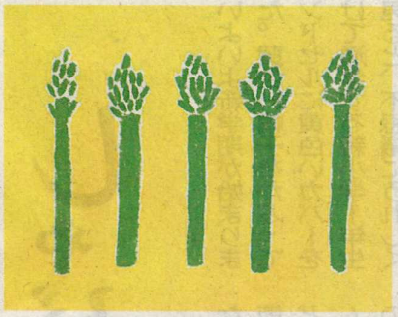
海原純子

長く続ける

4月1日が誕生日なので、またひとつ年をとった。数字をみるとギョッとしたりする。そして、ギョッとしながらずい分長い間いろいろとやってきたなあ、と思う。大学を卒業したころは将来のことなど考えたりせず、ただ手探り状態で仕事してきた。インターネットもない時代だし、まだファクシミリもなかった。文献ひとつ手に入れるにも手間がかかった。先輩の女性医師も大学病院にはごくわずかだった。今とはずい分環境が違う。

自分でクリニックを開設していた間は、仕事の重圧と責任でつぶれそうだった。細々とだが仕事を継続してきたことが奇跡的な気もする。この間たくさん本を書いたが売れた本はない。論文を量産したわけでもなく、業績をあげたわけでもない。医師というと金持ちだと思われがちだが、貯金やものをためることより旅の方が好きで、写真を撮って旅することでほとんどが消えていった。

「あの分をためてたら、今ごろマンションを買えてたかもね」と言ったら、家族に「貯金してたら病気になって病院代になってたんじゃない」と言われてしまった。



題字・イラスト　北村人

まあ結果としては業績やマンションにはならなかったが、この長年の細々とした仕事の継続は、確実に私自身をかえてくれたと思う。若いころの自分をふり返ると、どうしようもない子どもだった。しかし、どうしようもない子どもでも医師という立場になると相手の話をきちんときき、共感しないと仕事にならない。患者さんに信頼してもらうためには、ていねいに細かく気持ちをくみとる感性が不可欠だ。最も大変で苦労するのは、自分の心の中に「そんな風に考えなければいいのに」などという気持ちがうかんできて共感しにくい時である。自分と違うものの見方をする人を受け入れ、その人の気持ちを想像し、「ああ、そんな風に考えてしまうんだなあ」というようになるまでには時間がかかる。しかし、こうした作業を毎日毎日くり返しているうちに、自分と全く異なる感じ方をする人に対して共感できるようになり、更にそれが苦痛ではなくなり、無理がなくなってきた。

仕事はすごい力をもつものだと思う。わがまま勝手な若者だった私を大人にかえてくれた。いや、仕事の力がすごいのではなく何事も細々とでも長く一生懸命続けることは力をもつのだと思う。

昨年、講演会がきっかけでご縁をいただいた鎌倉・円覚寺の横田南嶺管長が、坂村真民氏の「鈍刀を磨く」という詩を教えてくださった。

鈍刀というのは切れ味のよくない刀である。研いでも光らない。みんなは研いでも無駄だというが、そんな言葉に耳を借さなくていい。せっせと磨いても刀は光らないが、磨く本人が光ってくる。才能がないからなどと言わずに細々とでも続ける。大事にしたい思いである。

（日本医大特任教授）